

東日本大震災
あの日を未来につなぐ、宮城のいま。

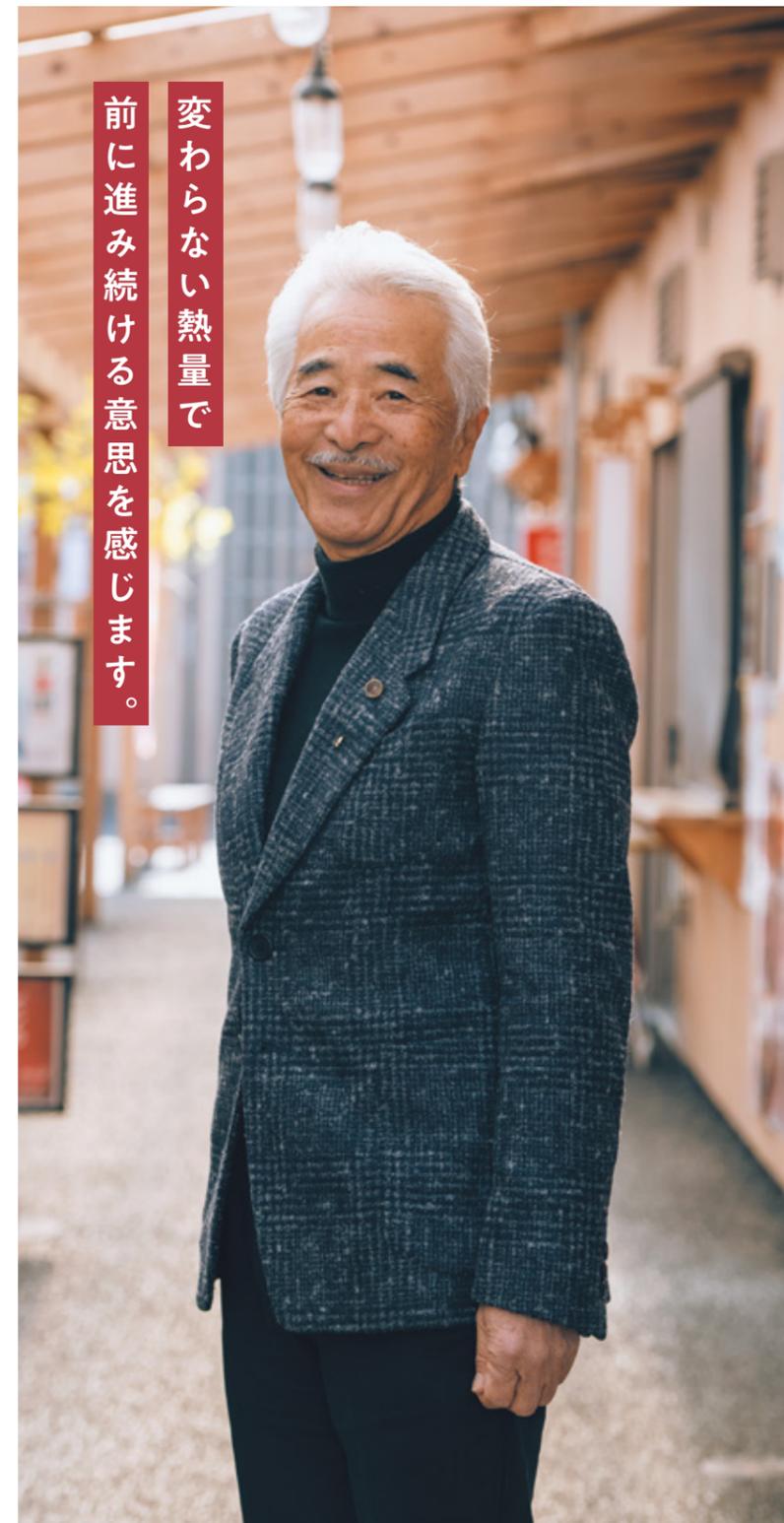
2020.12.11

NOW IS.

Vol.
55
December, 2020

ナウイズ
毎月11日発行

さとう宗幸
in 南三陸



変わらない熱量で
前に進み続ける意思を感じます。



NOW IS. 対談

対談

Talk Session

in 南三陸
MINAMISANRIKU

場所は変わっても、 変わらない熱量がある。 前を向く 南三陸さんさん商店街。

2016年5月に創刊した宮城の復興を伝える広報紙「NOW IS」。さとう宗幸さんはその創刊号で、当時まだ仮設だった南三陸さんさん商店街を訪れていました。今回は、その思い出の地を再度訪問。本設商店街として4年目を迎えた南三陸さんさん商店街の新たな歩みについてお話を伺いました。

懐かしさを残しつつ、常に挑戦を続ける。

さとう宗幸（以下さとう）——今

日は平日なのに、お客さんがたくさん来てますね。

佐藤潤也（以下佐藤）——そうですね。南三陸町震災復興祈念公園と商店街をつなぐ「中橋」が完成してから、お客さまが増えました。新型コロナウイルス感染症の流行で、3月から客足が落ちはじめ、4月はどん底だったのですが、商店の方の努力で、どうにか持ち直しています。

さとう——この本設の商店街の建物は、新国立競技場を手掛けた隈研吾さんの設計でしょう。最初に知ったときは驚いたなあ！

佐藤——そうですね。「中橋」も隈さんの設計です。

さとう——南三陸杉を使っているんですよ。木のぬくもりを感じさせる建物で、温かみがあったいい。仮設の時も、仮設の良さがあったけどね。

佐藤——狭いなりに工夫しながら色々なことに挑戦していたのが懐かしいです。

ペントもおもしろかったなあ。海外のお客さまをお連れしたとき、ワカメの詰め放題をやっていた。すごくおもしろがってくれたのを覚えています。

佐藤——そういうエネルギーは今も変わってないですね。ここに入っている商店の方は、いつも自分の店の売上だけではなく、商店街全体のことを考えているんです。前向きなんですよね。やってやろうという人が集まっている。今の本設商店街に移ってから3年が経ち、最近また楽しいアイデアがどんどん出てく

るようになりました。今回のコロナ禍を乗り越えているのも、この前向きな雰囲気のおかげかなと思っています。

さとう——場所は変われど、変わらないものもある。そういう熱量みたいなものは、変わってほしくないものですよ。それに、この商店街は昔ながらの商店の匂いや、風景を残してくれているなど感じます。「きりこ」もそうでしょう。昔、震災の前、商店の軒先に「きりこ」がずっと掲げられていたのが、すこく記憶に残っているんです。い

い文化だなと思って。今もあちこちで見られますよね。

佐藤——そうですね。イベントの時などには、広場に大きな「きりこ」を掲げたりしています。

さとう——同じ風景を取り戻すことは望めないけど、そうやって伝統的なイベントも残してくれているのは、昔から宮城に住む者としてうれしいですね。

として働くようになってからは、地域の祭りにも参加するようになって、いい人が集まるまちだなと、より感じるようになりました。

佐藤——商店街は今、観光客の方のほうが多いですが、これからは、地域の方たちも集える場になってほしいなと思っています。どうやったら来てもらえるか、魅力を発信できるか考えながら、商店の方たちと一緒に頑張りたいと思っています。

※南三陸の宮司の氏子たちのために半紙で作る神棚飾りのこと。

Sato Junya

佐藤潤也

さとう
じゅんや

PROFILE

南三陸町志津川出身。株式会社南三陸まちづくり未来所属。2015年から仮設商店街事務局として勤務し、本設となった現在も同職。まちの祭りに参加するなど、まちづくりに積極的に参加。

Sato Muneyuki

さとう宗幸

さとう
むねゆき

PROFILE

1949年生まれ、大崎市出身。78年に「青葉城恋唄」でデビュー後、ミヤギテレビ「OH!バンドス」の司会など多方面で活躍。2005年に宮城県ゆかりの歌手らで「びっきの会」を設立し、チャリティ活動にも取り組む。



後ろ向きな人がいないんです。
知恵を出し合って、連携しています。



内唯一！奇妙な生き物『ティラコ』化 ふみさんりく 発掘ミ



ミュージアムの企画を主導する高橋直哉さんと。

Visit 南三陸 MINAMI SANRIKU

商店街のきっかけに なった「復興市」。

夕方の情報番組の司会として、南三陸町の復興をずっと見

てきたさとうさん。対談の後、「復興市」の話題に。「震災後最初の復興の時、番組のみんなが取材に来たんだよ。あの時期にこんなに人が！って驚いた。」うなずく佐藤さん。「最初は売るものがなかったんだよ、と今でもよく当時の話を聞かれます。復興市は、南三陸さんさん商店街が始まるきっかけにもなったので、思い入れが深いんで

あの日思い返す 静かな祈りの場。

南三陸さんさん商店街をぐるりと回り、次の目的地は「南三

になっていて、その期間中に南三陸町として保存するかどうかを決めることになっています。こればかりは多数決で決めるような簡単な話ではありませんので、議論を重ねる必要があると思っています。及川さんの説明を聞き、「簡単には決められないことですね」とさとうさん。屋上を見上げながら、静かに手

を合わせました。

化石で南三陸に 新しい魅力。

南三陸町震災復興祈念公園をあとにして、次に向かったのは、「みなみさんりく発掘ミュージアム」。ミュージアムを管理する高橋直哉さんが笑顔で迎えてくれました。高橋さんの本

職は、歌津地区でホタテなどの養殖を営む漁師です。釣り体験などのブルーツーリズムを通して観光客を受け入れるなか、南三陸らしさを表現するために海や海産物以外の何かが必要だと感じ、この博物館の設立に至ったそうです。「漁師なのに化石なんだ！前から化石が好きだったの？」とさとうさん。「そ

うですね。歌津地区では2億6000万年前の地層を見ることができて、色々なところで化石を見つけれられます。昔から化石を拾うのが好きだったんですが、景観保護などの法律がある関係で、発掘はできなくて。震災後、復興工事現場で新たな遺跡や化石が見つかって、化石が再注目されるようになったんです」と高橋さん。「次々に新しい発見があるんですよ。このキ



「これが化石なんだ！へえ！」と覗き込むさとうさん。

高橋さんが発掘した「ウツギョリユウ」の歯の化石。



ここに注目！ NOW IS. EYE'S



「みなみさんりく発掘ミュージアム」は2019年の夏にオープン。農水産物直売所「みなさん館」の一部をリニューアルし、東北大学の協力を得て展示物を整備しました。化石発掘体験の申し込みは0226-36-2816まで。

1日の行程を終え、「新しいまちづくりに取り組んでいる姿を見ることができました」とさとうさんは話します。「まちとふるさとを愛しているというみなさんの想いを感じることができました。震災復興祈念公園もそうですし、化石とか、新しい魅力がたくさん出てきましたよね。震災では辛いことがたくさんあったけれど、苦しい、悲し

いだけではなく、そういう歴史を持ちつつ、新しい時代に向かっているという勢いを感じました。さとうさんは力強いまなざしで話します。「10年経ったからといって、それを節目に、とは考えたくない。実際に来てみると、まだまだ重機が動いているという事実がある。これからも支援を途切れさせないように、私自身も寄り添い続けたいと思いますし、発信し続けたいと強く感じました」。

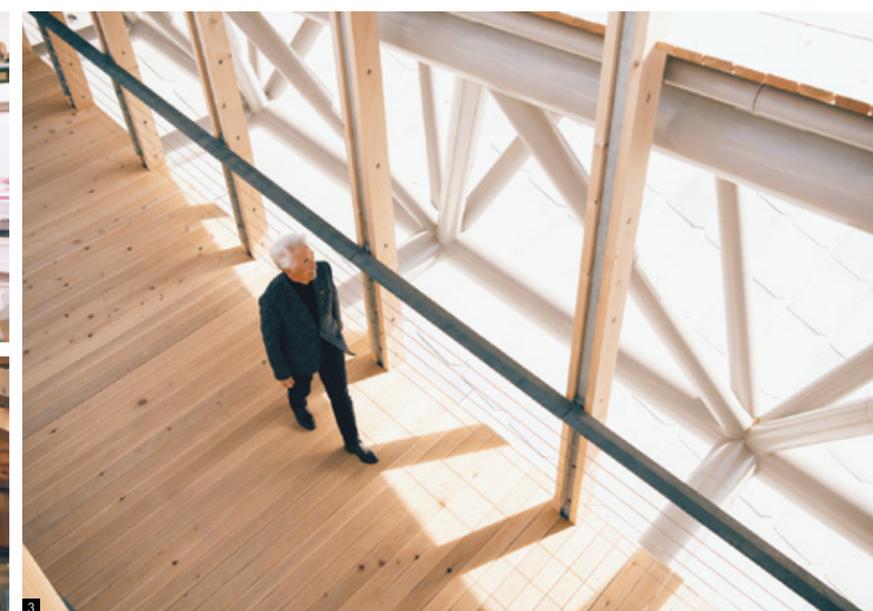


4



1

2



3



5

4 鉄骨だけが残る「旧防災対策庁舎」。案内板には庁舎のかつての姿が描かれています。
5 南三陸町震災復興祈念公園の築山にのぼるスロープは「記憶のみち」。地震発生からの時間の経過をたどることができます。

ノートで始める母子避難の備え



災害時の母子ケアに関するツールは下記より確認できます。
<https://honami-yoshida.jimdofree.com>



みなさんの元氣と笑顔を
増やしたい
吉田 穂波
Yoshida Yuki Official Site

「本来、私は避難を呼びかける立場ですが、2019年の大雨のとき自宅にいて子どもを抱え、いざ災害の当事者になると恐怖や遠慮、避難所の状況が分からないことへの不安などでなかなか動けませんでした。このノートを妊産婦が困った時の道しるべとして活用してもらえれば。」

「助けを求めることは相手への信頼の証だと考えましょう。支援する側は頼られてうれしいものです。助けてと言え、関係は社会にとってもプラスです。自分を責めず、助けられ上手になろうと呼びかけます。妊産中であれば、災害時に出産が重なる可能性もあります。吉田さんは、「地域の妊産婦支援に『防災』の要素が加われば、支援の体制が有機的につながる」と期待を込めます。

みやぎ復興情報
ポータルサイトは
コチラから!



<https://www.fukkomiyaagi.jp>

check! 01
避難に必要な重要事項を
まとめておくことが
母子の健康を守る

妊産婦や乳児は災害時のストレスや医療ケア不足により体調が急変するリスクが高くなります。昨今はコロナ禍で在宅避難も視野に入れる必要があり、適切なケアを

受けられる情報を得ることがますます重要になっています。自らも6児の母である吉田穂波さんは、幼子を抱えながらも東日本大震災の被災地支援に奔走しました。子の夜泣きを負い目を感じたり、授乳を躊躇したりする妊産婦の声を受け、いざという時に使える「あかちゃんとママを守る防災ノート」を作成・発行しています。

ノートは書き込み式で避難ルートの確認や必要なもののリストアップが可能で、健康保険証の写しなども貼り付けることができます。被災時には医療者などに見せることでそのまま健康状態を伝えられるほか、避難生活に必要な知識も書かれているので、ガイドとしても活用できます。

check! 02
頼むことは信頼の証
ケアが必要な人こそ
助けられ上手になろう

妊産婦の状況をきちんと把握し支援につなげるために、地域の連携や母子避難所の開設に力を入れている吉田さん。弱い立場になりがちな時こそ、助けを早く受け止める力として「受援力」が大切だといえます。

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を開設しています! 復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取組などを発信しています。

NOW IS. 防災

BOSAI FRONT LINE

Vol.19

PROFILE

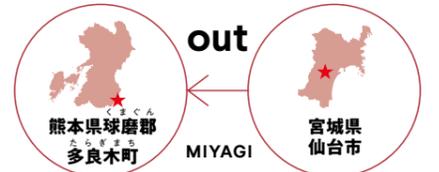
よしだ ほんなみ
吉田 穂波さん



神奈川県立保健福祉大学院教授。医師、医学博士。子育てしながらハーバード大学へ留学し、公衆衛生学修士号を取得。東日本大震災発生後は現地で活動を行い、被災時の母子支援の課題について調査・報告した。著書に「時間がない!から、なんでもできる!」など。

活躍する応援職員

SUPPORT POWER



国土交通省 東北地方整備局 道路部
道路工事課 改良第一係長
橋本 匡浩 さん 宮城県から熊本県に派遣



**元の生活を取り戻せるよう
インフラの早期復旧に向け活動**

「TEC-FORCEは、縁の下の力持ちだと思っています」と話すのは、国土交通省東北地方整備局の橋本さんです。九州地方で発生した令和2年7月豪雨で発生した令和2年7月豪雨では、TEC-FORCE(緊急災害対策派遣隊)として、熊本県球磨郡多良木町の道路の復旧支援を担当しました。

TEC-FORCEは、大規模災害への備えとして、迅速に地方公共団体への支援が行えるよう2008年4月に創設。大規模災害が発生した際、被災状況の把握や、被害拡大の防止、被災地の早期復旧などが主な活動です。隊員は国土交通省地方整備局などの職員を中心に、14、386名(2020年4月時点)が任命されており、全国から被災地に出動します。

災害時、人命救助や捜索活動を行うのは自衛隊や警察、消防ですが、TEC-FORCEは、被災した地域が1日も早く元の生活を取り戻せるよう、河川・道路・港湾など、インフラの早期復旧に向けた活動を行う、いわば「普段の生活を支える縁の下の力持ち」です。

橋本さんが支援に入ったのは、槻木という109人の集落で、豪雨により市街地とつながる県道が崩落し、自動車による交通が分断されていました。「二歩一歩踏査し、道路や橋梁などの被災状況を目視で確認します。被災箇所については、被災規模の調査や復旧工法の立案を行いました。地域の方々から激励の声をいただく、みなさんの期待の大きさを感じ、身が引き締まります」。

平時は道路部道路工事課で、道路整備などの業務を行う橋本さん。東日本大震災では、被災地の道路交通確保のため、国道の代替路となる迂回路設定のほか、仙台バイパスの被災状況調査を行いました。「物流や救急搬送の迅速化など、震災で道路の必要性を再認識しました。これからも『命を守る道』をつくるという使命を果たしたいです」。

*TEC-FORCE(TEC: Technical Emergency Control)略 大規模災害が発生した時に、技術的な支援を行う部隊という意味。

INFORMATION from MIYAGI

〔宮城県からのお知らせ〕

01 震災復興ポスターを配布しています!

宮城県の復興の「いま」をお伝えするとともに、復興の過程で得られた新たな「価値・教訓」を全国に発信するため、今もお復興に向けて取り組む方々の決意や想いを表したポスターを4種類作成しました。震災の記憶の風化防止や、防災・減災を目的とした掲出を行っていた方には無料でご提供いたします。



02 「宮城県震災復興パネル」の貸出について

宮城の復興状況をまとめた「宮城県震災復興パネル」の貸出を行っています。防災等のイベントのほか、大勢の方がご覧になる場所で展示いただける場合には無料でお貸しします(送料は利用者負担)。全10枚のうち、枚数を指定した貸出も受け付けていますので、是非ご検討ください。

●仕様等
サイズ:A1、枚数:10枚、
貸出料:無料、送料:利用者負担

ポスターとパネルの詳細は
みやぎ復興情報ポータルサイトで検索

◎県震災復興推進課
☎022-211-2408



Thank you from MIYAGI

宮城から、ありがとう。

全国各地、世界各国から寄せられた、たくさんの支援。
宮城の復興は、そんな数多の想いで成し遂げられています。

SUPPORT FILE
No.7

From 台湾 To 南三陸町

南三陸病院

南三陸町内唯一の病院である「南三陸病院」。前身の公立志津川病院は、東日本大震災の津波で被災。2011年4月に外来機能を担う公立南三陸診療所を開設、同年6月には、隣接する登米市に入院施設として公立志津川病院を開設し、分散運営を行っていました。再建にあたり大きな力となったのは、台湾から寄せられた海外救援金でした。台湾赤十字組織から建築費用の約4割にあたる22億2,000万円もの支援を受け、2015年12月に診療開始となりました。

診療科は内科や外科、小児科など10科で、病床は90床。病院施設に加え、地域の保健や福祉といった行政サービス施設「総合ケアセンター」も併設。町の医療・保健・福祉の拠点施設として、それぞれが連携を取りながらサービスの提供を行う「地域包括ケアシステム」の推進に取り組んでいます。両施設の間には、「みなさん通り」というホールがあり、緊急時にはトリアージ（※）をする場所としても使えるようになっていました。「このホールは緊急時、多くの人が訪れて椅子に座りきれない場

合でも、底冷えしないよう床暖房を設置しています。震災時はとても寒かったですから。」と事務次長の後藤正博（ごとうのりひろ）さんは言います。緊急時にベッドとして使えるソファをロビーに配置したり、柱の所々には酸素取り込み口を設置したり、震災の教訓を活かしています。事務長の佐藤和則（さとうわのり）さんは「本院の来院者数は1日平均200人で、病床稼働率は90%です。町の入院施設はここしかありませんので、地域医療の拠点としてこれからも頑張りたい」と話してくれました。



1 病院、ケアセンターの両施設を合わせて「南三陸病院・総合ケアセンター南三陸」と呼ばれています。2 南三陸町と台湾、両者をつなぐように「絆」が強く刻まれている記念碑。3 取材に対応してくれた後藤さん（左）と佐藤さん（右）。4 みなさん通り。5 南三陸町の家々の神棚には、神社の神職が縁起物を切り抜いた半紙「きりこ」を飾る風習があります。訪れた方に元気になってもらいたいと、「きりこ」を模したガラススクリーンが、外来の待合スペースと病室に飾られています。

※トリアージ: 大事故・災害などで同時に多数の患者が出た際に、一人でも多くの傷病者に対して最善の治療を行うため、手当ての緊急度に従って優先順位をつけること。

NOW IS. 55

発行: 2020年12月11日 宮城県震災復興本部(事務局: 震災復興推進課)
〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号
Tel: 022-211-2408 Fax: 022-211-2493

『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。

宮城県
Miyagi Prefectural Government